

京都春期特別集会

聖書はドラマである

1980年6月8日

小池辰雄

天道地路 讚美歌が自然にできる 信仰は否定道のドラマ 根源の現実で聴かれている 神の
根源語 使徒的信仰 即如一如の世界に入る 祈り

●天道地路

よくお出かけくださいました。まあ私はしゃべりだと、私の話は非論理的な話です。話自身がドラマですから、ノートなんかとろうとしたってダメなんです。今日、私の話を初めて聞く方は相当いらつしやると思いますが。

ユダヤ人は「聖書」と言わない。「律法・預言者および諸書」、ヘブライ語で「トーラー・ネビーム・ウー・ケスビーム」という。キリスト教ではこれを旧約聖書という。ユダヤ人は律法の民です。これははつきりしている。この旧約の宗教の一番精神的、霊的中心はこの預言者です。この預言者の中で一番最高峰でありまた深淵のごときものはイザヤ書です。イザヤ書全66章ですが、ちょうど聖書は66巻ですが、旧約聖書の中でもし一巻を選ぶとすれば、私は文句なしにイザヤ書を選びます。これが第一イザヤ、第二イザヤ、第三イザヤと三代にわたって、多分、師弟関係でしょう。これは歴史ですから。

大体、「キリスト教」という——私は50年間、教師をしていますけれども、「教」の字が嫌いなんです——「キリスト教」というのは。それで私は「キリスト道」という。日本人は本来、道の民ではないですか。茶道、華道、柔道、剣道、書道、画道、これはみんな道で、術ではない。そういう素晴らしい日本人は精神的な伝統を持っているのに、なぜそれをいい加減にするかと。

キリストは、

「我は道なり」

と。あれは定冠詞が付いている。

「我こそは道なり」

というんだ、キリストは。だから、私は「キリスト道」という。『キリスト道』という新書版の本も書きましたけれども。

この「道」ということ。天道、地路という。神さまの道はこれ「天道」です。天道をいかにして歩くかという、我々は地上において「地路」として歩く。一人びとりが本当に道を歩く時には——これは道ではない——各人の足でもって歩くから、それは「路」という。自分は道であるなんて思っただけはいかん。ただし、天道は一人びとりにおいてのつぴき



ならい路となります。これは天道を本当に地において自ら行ずるならば、それが本当の「路」なんです。路でなければ、これは行じているわけにいかない。

神さまの歴史は創世記から黙示録まで、これはひとつは道なんです。天道。しかしながら、この絶対界——これは私が作った図ですけれども——これは時間線、上が絶対界です。歴史だけでも、聖書の歴史はいわゆる歴史ではない。これは神の啓示史。絶対界がこの相対界に切りかかってくるところの、絶対次元が相対次元の世界に切りかかってくるところの、そういうドラマですから。相対界はここに三角形で書いた。詩篇84篇にこの世のことを「悪の幕屋」といつている。これは文化文明の世界。文化文明の世界は、これはその質からいうと、サタンの配下になっている。大方、現世は。これを救わんとして——もともとそうではなかったけれども、パラダイス・ロストになってしまったから——ここがパラダイスですから。これは天国。このパラダイスが下の方に逆三角形になって落ちてきた。これを救おうとしているドラマなんです、聖書のドラマというのは。

だから、我々はそのドラマを劇場で観ているような気持ではダメなんです。自分がドラマの中の一員とならないかぎり、絶対に聖書は読めない。はつきり言っておきます。いわゆる「聖書研究」はいくらでもやって結構ですよ、悪くはない。けれども、いわゆる聖書研究でもって、ギリシア語ができようがヘブライ語ができようが、その方がなおよくわかるなんて思つて、錯覚をきたしているのがいますけれども、そんなことではない。皆さんは日本語で一向に差し支えない。問題はそのドラマの中に自分を入れる。聖書の中に自分を投じて、サマリヤの女とキリストが語つていらつしやれば、自分がサマリヤの女となつて聞いていなければダメなんです。

「そうですか、そういう女がいましたか」

なんて、そうじゃない。自分がサマリヤの女となつて、そして今、現にキリストにぶつかつて、「参りました！」と。そのドラマでは、自分が降参するまでは、このドラマの中に本当の意味で入れない。入つたような顔しているけれども。「聖書がわかりましたの、わからないの」と、普通、そんなことを言つて、一生懸命で釈義学なんてやっていくけれども。私はそれを何もけなすのではないけれども、それはみんな観念の世界なんです。観念の真理はあるでしょう。けれども、観念の真理では、聖書はどうにもなりません。

たとえば、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書は全聖書のアルファにしてオメガです。始めにして終わり。福音書のキリストにぶつかつて——毎日必ず読んで下さいよ——「読む」というのは、本当は読むのではない。聞く、つかまれる、引つ張り回される。福音書でキリストにでつくわすでしょ。そうすると、キリストという人はケタが違います。そして、キリストは、

「私を見た者は父なる神を見たのである」

と。今の若い人が、「有神論だ、無神論だ、多神論だ」と、なんだかんだとやっている。そ



んなものがいくら結論が出たつてどうにもならん。どの結論が出たつてどうにもならん。この福音書に来て、そして、このキリストにぶつかつて、「ここに神が顕れている」と。神はキリストにおいてこのドラマの主人公をつくつていらっしゃるんです。聖書のドラマの主人公はこのイエス・キリストですから。著者は神自身。キリストはその主人公。旧約聖書も、

「我について証するなり」

と、キリストは言っておられる。宗教改革者マルチン・ルターはこの旧約聖書のエホバの神さまを「デア ヘル」とドイツ語で書いている。それはルッターはその中にすぐキリストを思つて読んでいた。さすがにルッターです。

そういう、キリストにこの福音書でぶつかつて、そしてもう、その一言でも我々は実行できない。一番先の言葉は何ですか。

「幸いなるかな、心の貧しき者、天国はその人のものなり」

と。誰が及第できるですか。本当に「心の貧しい」ということが我々は言えるか。みんな自我がある。

キリストは自分を告白していらつしやるんです。彼自身が本当に心が貧しかった。自分を何ものともしなかつた。だから、私はキリストのことを、「自分を何ものともしない」というから、「無者」と言っている。まだ誰もそんなことを言わないらしいね。自分が無者なんだ。何もない。

「善き先生」

と言つたら、

「なぜ、私のことを善いと言うか。神さまの他に善いものはあるか」

と。ああいう言葉に、ピシヤツとぶつかつて、参らなければダメですよ。「そうですか」ではないですよ、「参りました!」と。皆さんは、今この会場はドラマですからね、その中に本当に入つて下さいよ。私は語りながら入るし、あなた方は聞きながら入つてくれなければ。

「今日の講演会はよかつたの、わるかつたの」

なんて、そんなことではないですから。命懸けの集会です、今。人間の魂はそういった絶対的な何ものかにもふれるまではどうにもならないようにできているんです。そんな素晴らしいものなんです、我々一人びとりの魂は。

「全世界とも替えられない」

とキリストは言われたではないですか。……（異言）……ごめん、異言ができました。

そういう、このキリストが一人びとりを、あなた方一人びとりはみな顔が違うでしょうが。天下一品なんだ、誰でも。何もひとを羨むことはない。一人びとりが天下一品。神さまは類型的にはお造りにならない。個人がそうだし、社会や団体がそうだし、教会がいくらあつたつていいですよ。国がいくつあつてもいいよ。いろんなイデオロギーがあつたつて構わない。それを、すぐ自分を絶対化して、神における絶対という、この神ということを忘れ



てね、そいつを抜きにして絶対になっているから、これが困ったものだ。そうすると、すぐ自分のイデオロギーに折伏しなければならぬと、喧嘩している。イデオロギーで平和なんか絶対にこないですから。20世紀は危ないよ。

●讃美歌が自然にできる

私はこないだ讃美歌を15ばかり作ってしまったて、そこにこういう讃美歌がある。「神を無みて」（1979/12/16作）第6節、

6 幼児どもに 国境なし

イデオロギーの 限界を悟り

人間に帰りにて 手を握り合え

7 人はもと霊止 神仏なり

万象帰一 物心一如

万ずの人よ 相抱けよや

「人」とは「霊止」、霊が止まる、神霊が止まっているのを「ひと」という。『大言海』（辞典）に書いてあります。昔の日本人はやつぱりえらいよ。「ひと」とは、神霊の止まっているのを「霊止」というので、神霊が止まっていけない、アズ・イフ（かのような）の人間がたくさんいるわけだ。私もかつてそうだった。

「人はもと霊止 神仏なり」

という。「衆生悉く仏性あり」という。仏教だつて仏性という。神性。もともと「神の似

姿」に造られている。本質的には神に同質的に造られていたんですよ。特にその点では、禅宗なんかは悟りの世界で入ろうとやっているわ、一生懸命でね。

「万象帰一 物心一如 万ずの人よ相抱けよや」

と。

「幾百万の人たちよ、相抱けよ。この接吻を、この抱擁を全世界に及ぼせ。星の幕屋の彼方には愛の父ぞ住み給う」

という。ベートーヴェンの、シラーの有名な「第九シンフォニー」にもあるじゃないですか。あれを本当にその気になって歌っているのかな。暮れになるとちよつと歌ったら調子がいいくらいなもので。ダメですよ。あれは、シラー、ベートーヴェンが祈つて大讃歌をやっているわけだよな。

とにかく、魂のこもっていないようなものは、みんなダメですよ、何をするにも。讃美歌一つを歌うにも、本当に魂をこめて歌わなければ。「まずい、うまい」ではないんです。

そういう讃美歌が自然にできてしまう。私は大体これを一晚で作ってしまう。一晚と言つたつて、まず一時間か二時間だね、もつと早いかもしれない。湧いてくるからね。

私たちは、キリストの生きた道を本当に地道に歩いて、イエス・キリストに福音書でぶ



つかって、そして、「参りました！」と降参すると、キリストに捕まる。そうすると、その力が入ってくる。だけれども、

「降参したけれども、また降参しそなつてしまった」

とかね、まあいろいろだよ、人間というのは。ちょうどペテロみたいでね、非常にキリストに褒められたかと思つたら、「サタンよ、退け！」なんてやられてみたりね。私たち自身がペテロなんだ。波のようなんだ。

だけれども、「結構だね」と。あの、キリストの十字架の横に十字架が二つあった。片一方のやつは非常に傲慢なやつで、

「お前は神の子なら、俺たちを救つたらいいだろう」
なんて。もう片一方は、

「どうも散々悪いことをしました。これは当然です。せめても御国にいらっし

やる時、覚えて下さい」

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と。人類を二つに分ける基準は、「心が碎けるか、碎けないか」のこれだけです。我々はみんな傲慢なんです。自我があるから、我執があるから。

この碎け。これはイザヤ書53章でもつてそれを預言している。イザヤ書53章はキリストの預言で、こんな文字が一体あるかという、ナザレのイエスを知っているような。彼が碎かれたことによつて、我々の不義は赦された。我々の罪を負われた。「十字架の碎け」と申し上げるのはそのことです。だから、一時的には私たちは碎けたり降参したりしますけれども、本当の降参、本当の碎けは全部、キリストが十字架で引き受けてしまった。

「私を見る、お前にこの碎けをやるよ、この降参をやるよ」

と。神さまに降参しているんだ、キリストは。神さまの前に本当に平伏している。

「汝の御意を、どうぞ成して下さい。私ではありません」

と。今の若い人はね、とかく

「信仰なんて、意気地がない」

なんて。冗談いうなど。こんな電気の光が太陽の光にかなうかと。無限の桁違いの光は、力は、生命はキリストが持つている。それに連結しないで、勢いよくやっていても、それは始めは青年だから勢いがいいよ。けれども、それは放物線みたいで、しまいには下方に落ちてしまう。私は76歳だけれども、私は上昇カーブだから。肉体は衰えるかもしれませんよ、けれども、

「内なるものは日々新なり」

とパウロが言っているとおります。

私は御霊を受けるまでは、結核の療養所なんて行くと、伝染病が移るかなんて思って、消毒したりマスクしたりした。けれども、この御霊が来てしまったら、こつちから流れる

からね、相手が癩病人だろうと何だろうと、もう全然何ともなくなってしまう。使徒行伝的な不思議な事が質的には起きてくるからしょうがない。

こないだも、二年間耳鳴りがしてどうにもならないという人がいた。「そうですか、ちょっとそこに坐ってください」と、私は30秒ですよ、「はいっ」と。治ってしまった。もう上から来ますからね。「どうしたんでしよう？」と言うんだ、その人は。どうしたもヘタクレもない。キリストがなされた。

キリストの直弟子たちは、ペテロでもヨハネでもパウロでも——パウロは直弟子ではないけれども、復活のキリストに直弟子にされてしまった——この十字架でもつてすつ飛ばされて、そこにはどうしてもこの聖霊が来ざるを得ない。……問題は本当に、

「われキリストと共に十字架せられたり。われ生く。されどわれにあらざ。キリストわがうちに在りて生き給うなり」

とは何ですか。思っているんですか、パウロは。思っているのではない。

「御霊のキリストが、キリストの御霊が、私の中に本当に来てござる」と。コリント後書11章のあの多くの苦難を突破できたのは正に聖霊の力なんです。

今のキリスト教は気がぬけてしまっているから、もう私は出てしまつて孤軍です、私はひとり。孤軍だけれども、天に万軍がいるから。天軍でもいい。万軍のエホバです。孤軍万軍という。パウロさんや、ペテロさんや、使徒たちが私の味方で上にいて、応援してくれるから、ちつともさびしくない。もう賑やかでしょうがない。本当ですよ。それで、「パウロさん！」と言うと、答えてくれるよ、もちろん。キリストを通して言いますよ、もちろん私は、イエスを通して。

私みたいなものは、あなた方と相対的に比較してみたって、私は一番ダメな野郎です、泣き虫の弱虫の。だから、中学時代の私を知っている人は、

「どうして小池はあんなになつてしまったのか、キチガイではないか？」
なんて。

「神のためには狂えりなり」

とパウロが言っているとおおり。ドラマ中のドラマを体験した者はパウロなんです。

●信仰は否定道のドラマ

イスラエルの民、アブラハムはウルを出ましたね、出ウル。行く所を知らずして出て行った。神さまの言葉に従つて、神さまの力によつて。今度は、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、いわゆる始祖たち。ヤコブはイスラエル。あの創世記はおもしろいね、いくら読んでも。読んで下さいよ。ヤコブも非常にドラマチックな生涯を送った。ヨセフは兄貴どもに妬まれて、外にやられてしまつて、そして、ヨセフはエジプトに売られてしまった。ところが、このヨセフがエジプトで偉いことになった。宰相にまでなつた。そして、飢饉が



きて、兄さんどもがお父さんの命令を受けてやって来た。それで「悪かった」とあやまった。ヨセフは、

「あなた方ではない。神さまが私をここに遣わしたんだ」

と言う。全部、神の言、力によって彼らは動いていた。これがこの信仰史なんです。それから約300年後、紀元前1275年あたり、モーセが出エジプトをやった。これが大変なことです。モーセは、

「私にはそんなことはできません」

と。その通り、モーセにはできっこない。けれども、神さまは

「私がお前と一緒にいる。これが印だ。行け」

「はい、そうですか」

とモーセは言う、「はい」と。

この頃の若い人たちは「はい」となかなか言わないので困る。私たちは小さい時から、「はい」ということをはっきり言わせられた。「でも」なんて言っつて、デモ行進ばかりやっている。「でも、こうじゃありませんか」なんて。

「はい」と言うのが、これが信仰なんです。神を信ずるとは、神に対して「然り」と言い、己に対して「否」と言うことです。プラスとマイナス、これは放電する。霊的に放電する。自分を肯定しているうちはダメですよ、自分を否定していかなければ。これは否定道です。信仰は否定道なんです。否定道のドラマなんです。イエス自身がそうだった。

「わが意ではない。あなたの御意をどうぞ成して下さい」

と、傍観していない。「どうぞ成して下さい」と言っつて、挺身している。自分を明け渡している。「どうぞ、お使い下さい」と。神さまは主だから、キリストは神さまの僕。「エホバの僕」というあのイザヤ書の預言をキリストは自ら行ぜられた。存在的にはキリストは僕である。本質的には子である。子にして僕である。ただ「神の子だ」なんて、いい気になっつているのではない。本当の僕でなければ、神の子にはなれないんです。神の意志を百パーセントに受けとつて行つたから。それで、十字架なんか本当は背負いたくなくなつたんだ、キリストは。彼は神さまの意志を全部、全く行じて体現しましたから。義人とは神の意志を、神の命令を全部「はい」と言っつて行する者を義人という。そういう

「義人はひとりだになし」

とパウロが言っつておるとおり、詩篇13篇にもあるとおおり。義人というのは、何か正義とかいうのではない。神さまを「然り」と言っつて動くのを義という。これはもう聖書を貫いている。創世記から黙示録まで。義というのは非常に力強い、内容の凄い言葉です。観念ではないですよ。みんな観念化してしまうから困る。キリストの歩き方はみな義なんです。神さまに従っつている。自分が本当に自分の意志に死んでしまう。

ところが、相手が神さまですから、この僕が本当の自由を持つ。絶対的な自由を持つ。



自己に囚われてないからね。自己に囚われているかぎり、いくら「自由、自由」なんて言っても、そんなものはちつとも自由ではない。そういうのは勝手気ままというんです。「民主主義」なんていつても、これは勝手気まま主義だ、日本人が言っている普通の民主主義は。民主の上に神主がないから。神主というのがないから。それで「民主、民主」なんて、神さまが抜けているから。ダメですよ、そんな民主は。

「宗教は人の最も重要な関心事である」

と、多分、ミルトンの言った言葉です。今、日本には非常におかしな事態になっている。こんな民主主義だったら、引っくり返るね。私は教育界にいてやったけれども、ダメだよな。日本人の在り方の、やっぱり一番の責任者は教育者です。私もそういう教育の責任を担ってききましたけれども、失敗だらけです。結果は出てこない。結果が出てこなくてもしょうがないよ、言うだけのことは言ってきたつもりだけれども。だから、時々あとから、

「やっぱり、先生の言ったことは本当だ」

なんてやってくるのがあるけれどもね。

「レリギオン(宗教)」というのは再び結ぶという「再結」。宗教というのは本来「再結」という意味です。再結は人の最も重要な関心事である。「関心事」の「関心」はまだ薄かったことに昨日気がついた。心より身の方がいい。「関身事」。身に関わる事なんです。

キリストは、「お前の足をきれいにしよう」なんて言っているのではない。キリストは黙って洗って下さる。それが関わりです。身に関わってきた。存在に関わってきた。宗教は全存在に関わることである。「コンサーン」「インタレッセ」というのは全存在的な関わりのこと。実は、学問でもいろんな仕事でも結局は全存在的な関わりなんです。ただ頭ではない。ただ手でもない。その全存在的な関わりが一番根底となるものは、実は神さまを相手にすること。仏教なら、如来の世界。いいよ、如来だって。京都は偉大な坊さんを輩出したところだ。どっちにしろ本ものになって下さい。

「キリスト教は、あの十字架なんでものは、私はあまり好きではないから、仏教で行きます」なんて。ああ結構です。私は宗派争いなんか絶対にしないから。向こうでキリストとお釈迦さんはなにも喧嘩してませんから。ただ、私にはやりきれないです、このキリストは宇宙的なひとだから。カトリックでもプロテスタントでも何々教会でもいいですよ。問題はそこで「本ものをつかんでいるか」ということだけなんです。礼拝の仕方とか信仰箇条とか、どうだっかっていいですよ、そんなものは。みんな相対的なものだから。問題はその相対の奥に絶対があるかと。

「絶対なものが出てくるか。キリストが本当に生きている。御霊が出てくるか」と、結局それだけです。

私はいろんなものを読みますよ、ドイツ語のものも何でも。神学書も読んでいます。今度私は『無の神学』を書くけれども。どうしても抜けているんです、一つ。聖霊の事態が



本当に。彼らは体験していないから。「について」語っているうちはダメなんです、「の中から」ものを言わなければ。「について」いくら百点満点の答案を書いたってダメなんです。その中からでなくては。本当はもう書けないんです、白紙で出したらいいんだ、本当の答案は。そこに無限の文字がある。そのくらの絶言絶慮なんです、最後は。もう何とも表現できないです、イエスというひとは。

だから、私は『無の神学』を書いたら、ちよつとこれ正直、世界におそらくないものができ上がるのではないかと思つていますけれども。

「まあ何だ、こんなデタラメのことを言つて」

なんて。デタラメでも何も無い。本当はデタラメではない。

● 根源の現実で聴かれている

さつきから話はいろいろ飛びましたけれども。

出エジプトをして、モーセが神さまから律法をもらいました。モーセの律法。あれは「十誡」というけれども、「十言」なんです。十の言葉。誠命ではない。神の断言命法。

「汝、殺すなかれ」

ではない。

「汝は殺人はせじ、殺人はせす」

というへブライ語です。やつとこの頃、学者も気がついてきたようだけれども、私は本当はもつと前から気がついていました。

「殺人はせず」と神さまから信じかかっているんです。大体、「信仰」なんていうけれども、あの「信」は本当は上からきている。イスラエルの民を信じこんできている。「信ずる」「ことと」「愛する」こととは一つなんです。「信愛」という言葉があるように。それに応えないから、それが「不信」なんです。律法なんて本当は命令ではない。信じかかって、

「私がお前の神さまだから、お前は悪いことはしないね」

「はいっ」

と。そういうところなんです。それを、悪いことをするから困ったもんだ。先生は生徒に「勉強しろ」と言わずに、「よく勉強するね」と言うと、勉強していないやつは、「これは悪かった、勉強しよう」と。「勉強しろ」と言うと、「少し怠けてやろう」と。

「律法は罪を刺激する」

とパウロが言っているとおおり。そういう信の世界。上から来ている信です。上から来ている信、上から来ている愛、これを仏教的にいうと「本願」です。本願がかかっている。

私は親鸞の『歎異抄』は大好きだね。凄いね『歎異抄』というのは。世界のこないだまで生きていた、最大の神学者バルトがああ『歎異抄』を独訳で読んで、びっくりしている。

「東洋にはこんな素晴らしい信仰があるか」



と。日本人は一番凄い信仰が持てるような素質を持っていますよ。キリスト教神学もある程度生き詰まっているから。組織神学ではないですよ。ドラマチックな有機体的な、「オルガーニツシエ ウント ドラマーテツシエ テオロギー」なんてまだ誰も言わないけれども。そういうようなもので在らざるを得ない。神さまの真理なんてものは、私たちが組織だてることができるかと言うんだ。

今、私は何を皆さんに言おうとしているかというところ、「出、出、出」とあるでしょ。「出る」んです、みんな。それからこの旧約の歴史はずっとときまして、イスラエルの国は、サウロ・タビデ・ソロモンという、士師記のあとでその三代の単立王朝時代があって、それからソロモンからは後は二つの、イスラエルの国とユダの国に、南北朝に分かれました。そして、紀元前721年にアッシリヤにイスラエルが亡ぼされ、586年あるい587年にユダはバビロニアに亡ぼされる。そういうイスラエルとユダの国が滅びる時、これは不信に対する神さまの審判なんです。その審判の手下となったのが、アッシリヤの国とバビロニアの国なんです。どっちも悪い国なんだけれども仕方がない。神さまがそれを使つたんだ。そして、イスラエルもユダも滅びてしまった。バビロニア捕囚となって、50年捕囚されてから、ペルシヤ王のクロスが捕囚された人たちをエルサレムに帰した。これが出バビロニア。出エジプトは奴隷状態、艱難から解放された。こっちは罪の罰を受けた、それから解放。だから、出エジプトと出バビロニアというのは、そういうたような歴史的な意味を持っている。そして、出バビロニアの時に出了たのが、さつき申し上げたイザヤ書、特に第二イザヤ。それから、イスラエルは神殿宗教時代が55年からずつとくる。そしてキリストのところまでくるわけですけれども、非常に律法的な祭儀的な宗教になってしまった。そこで、硬化現象が起きた頃にイエスが現れたわけです。イエスが現れる時に、その前に洗礼のヨハネが現れて、そしてみんなに

「悔改めろ、今の在り方はとんでもない」

と。イエスもやって来た。

「なぜ、あんたは私のところ来ますか？ あんたは私から洗礼を受けるような

人ではない」

イエスは、

「いや、そうじゃない。私は今、正しいことをやるんだから」

と。彼は洗礼を受けながら、我々の罪の悔改めをキリストは自分で引き受けて下さった。そして、上がってきたらば、聖霊が鳩の如く臨んで来た。彼にとってはこの受洗は、悔改めと聖霊のバプテスマを一つにしてやってしまった、キリストは。このイエスがこのようにしてはつきりと——もともと神の子ですから、もともと霊的な人物には相違ない、もう12歳のキリストがそんなことを言っているんだから——はつきりとそこでもって御霊の權威をもって動き出したら、サタンの誘惑が来て、それと一騎討ちして勝った。これもキリ



ストは——聖霊が彼に充満していましたが——彼は霊的な男だといって霊を私しない。どこまでも神さまを崇めながら、神において戦った。これがキリストの戦いの勝利のわけです。そして、伝道を始めて、ケタ違いのことをマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書で言っただけで、またその業は——あれは奇跡ではないですよ、キリストのなさっていることは——全部、霊法が働いている。霊的法則が、活ける霊法が。「生命の御霊の法」とパウロがローマ書8章2節で言っているとおり。聖霊の神の言の権化たるところのキリストが伝道をはっきりなさって、そして、

「お前たちを本当は救ってやりたいんだけど、救うわけにいかんよ。今、私のすることにお前たちは躓く。わからない。けれども、今にお前たちを本当に集めるぞ。人をすなごる人にしてやるぞ」

と。あのキリストのやっていることは全部、徴ですよ。本当の神の国の本質の徴をみんなやっている。「ユダヤ人は徴を求める」というが、キリストは本当の徴を現した。ただ徴を徴とすると御利益になる。「病を癒された、ありがたい」といって、それだけに気持が傾いていると、それは御利益宗教です。それを通してキリストに本当に捕まるか。キリストとの交わりの生活を始めるか。そこなんです、問題は、「それはおかしい」というのも観念になってしまう。今度は、現象に囚われると御利益宗教になる。本当の福音はそこを通って根源の現実の中に入っていくことです。どうせ私たちの現実には相対的な現実で、滑ったり転んだり、いろんな歪んでいるんだ、人間の社会というのは。それ自身すぐ良くなるはずはない。けれども、その奥に本当に神に在って祈っていることは、根源の現実で聴かれています。必ず歴史の終わりにそれが、あるいは天界に現れる。

そういうことで、今に、

「私はお前たちに与えたいんだが、与えるわけにいかない。我に受くべきバプ

テスマあり。この火燃えたらんにはまた何をかせん」

と。「この火燃えたらんには」というのは聖霊の火のことです。「受くべきバプテスマ」というのは十字架のことです。

「十字架の贖罪を終わったら、お前たちの罪は完全に私は引き受けるから、もう心配するな。お前たちの過去も現在も未来も、地上の生涯のこんな相対的なものは、自分なんてものは見るな」

と。……皆さんも、私のドラマチックな話の中で、ドラマチックになりましたか。

それで、祈って待っていたら、臨んできたのが使徒行伝2章に出ているところの聖霊の降臨。そうしたら、「何かおかしいな」と言うやつがいる。「おかしいのではないよ」とペテロがはつきり言った。キリストと直結して地上にいたペテロと、キリストが十字架を通って天界から約束の霊を与えて下さったこのペテロは、ガラリ変わってしまった。……

乞食が何かくれるかと思ったら、ペテロは



「そうじゃないよ、私には何もなければいいけども、私の中にあるものを与える」と。そして、この跛者が立ってしまつたら、今度は、ペテロを神さまみたいにしてみんなが拝もうとしたから、

「私の信仰でも、私の敬虔でもない。そんなものがこの跛者を立たしたのでは
ない。ナザレのイエス・キリストがなしたんだよ」

と彼は言った。その前にペテロは、

「我を見よ」

と言いながら今度は、

「なぜ、私を見るか」

と言った。「我を見よ」というのは「わがうちなるキリストを見よ」ということ。そして今度は、人間ペテロを見たから、「なぜ、私を見るか。見方がちがうぞ」と。あれが本当の信仰の世界です。

● 神の根源語

使徒行伝は、私はいわゆる無教会時代は、わからないんだ、不思議なことばかり書いてあつて。けれども、この聖霊がきたら、なるほどこれはみんな本もので、もう文字がうめいている。皆さん、いいですか。ギリシア語でもヘブライ語でも日本語でも何でないですよ、神の根源語を、響きを受けとるまではダメなんです、この聖書は。根源語を。いろいろな万国の言葉の奥に——何訳があつたつていいよ——けれども、この神の根源語。「音楽は世界語」というでしょ。そのうように、神の根源語がこの聖書の奥に。これはたまたまヘブライ語。「ギリシア語は原文だ」なんて、そうじゃないよ。それは相対的には原文かもしれない。けれども、キリストや弟子たちが語つたのはヘブライ語の方言のアラミ語だからね。それをギリシア語にただ直して書いただけの話。

だから、あれは間違えたね。

「死者は死者をして葬らしめよ」

と。何かいろいろ理屈をつけて解釈しているよ。あれはそうじゃないんだ。

「死者は葬儀屋にまかせよ。お前は神の国を伝えよ」

と。「ミッタ」と「マッタ」とを間違えて、しまったということになった。……。アラミ語の奥の、神さまの本当の根源語の響きがこれ。仏教の偉大な坊さんもやっぱりそういう角度からお経を読んでいた。華嚴経とか法華経なんていうのは素晴らしいね、もつと私は勉強したいんだけど。

いいですか、少し誤訳なんかあつたつていいんですよ。だから、私は大胆な訳を、そのうちに時間でもあつたら、やりたいと思つていくくらいだ。私の『詩篇』はかなりその角度からやっているつもりですけども。



マルチン・ルターが言ったですよ、あんなに「神の言」ということを尊重したルターが、あるところで何と言っているかというところ、

「聖書の言葉は壊れたかけらみたいだ。神さまの言葉はこんなものに載りきれはしないんだ」

と、面白いことを言っている。さすがにルターだと思った。プロテスタントは、「神の御言、御言」と言って、金科玉条にしている。

「儀文は殺し、霊は活かす」

の、「儀文」にしてしまっている。観念信仰だとそういうことになる。

ところが、聖霊がくると、決して主観ではない。もうもの凄くその奥が読める。

「そうだ、お前はよく読んでくれた」

と、パウロは言ってますよ、上で。パウロだって私は七面倒くさくしょうがない。相当ユダヤ的な論理があるからね、あそここのところには。

それで、聖霊が来て、彼らが本当の救いの世界に入った。もう死んでも死なないところに来た。

パウロは、ところが、そのペンテコステの中にいないんだ、彼は。それで、信じている者を逆に迫害していた。パウロはユダヤ教のチャンピオンだから。パリサイ中のパリサイだから。律法を拳拳服膺して、

「律法の義については責むべきところなし」

と威張っていたやつだから。ところが、この復活のキリストがダマスコ途上で引っくり返した。これが本当にドラマなんです。これくらい個人的な引っくり返りの凄いドラマはないですよ、パウロ以上の。そうでしょ。だから、あの使徒行伝9章を読んで、もういい加減に読めないですよ、このパウロさんが引っくり返されるところを。

「何ぞ、我を迫害するか！」

と。もう三日三晩、目が見えず耳が聞こえずものが言えず。連れて行かれて、アナニヤによつて——ちゃんとアナニヤに示されている——按手された。今、「按手礼」というのがあるけれども、ダメですよ、牧師さんが本当に聖霊を受けなければ按手なんかしてはいけないんだ本当は。特別集会で私が手を按くと、引っくり返ったりするからね。ガラリ変わる。「いやあ、これは本当だ！」という。

私はいきなり天界から受けとつたんです、祈っているうちに。手島さんもそう。だから、1950年11月3日、これは私のペンテコステ。もう全身がしびれた。そして私は坐っていたのが、どれくらい知らんけれども、グーツと上がってしまった、空中に。帰りの汽車の中で聖書を読んだら、まあ今まで一体何を読んでいたかと。ボールが取れてしまったからね。ええ。本当ですよ。皆さん、頭で読んでいたらダメですよ、からだで読んで下さいよ、からだです。



日蓮さんが佐渡に流される前に言ったではないですか。

「頭で法華経を読むのはたくさんいる。心で読むのは少ないが、お前はからだで読めよ」

と言った。さすがは日蓮です。法華経が日蓮には化体しているから、彼が

「南無妙法蓮華経！」

と称えば、龍之口で斬ろうとしたやつがぶつたおれてしまう。もう本当ですよ。その通り。禅宗の坊さんでも、衣鉢を奪おうとしたら、取ろうとした手が動けなくなった。あの禅宗の第五祖になったあの米つき小僧は凄いやつだ。

●使徒的信仰

今は、原子力というのが物理の世界にあるけれども、キリストの原始力を、始めの力をいただいて下さいよ。これは聖霊なんです。十字架は、

「我は門なり」

というから、私は門構えに十の字を書くんだ。「門」の中に「十」を書く。そういう漢字はないよ、私が作ったんだから。キリストが、「我は門なり」と仰つたら、必ずそこに「十」の字を書く。そういう活字がないからしょうがないけれどもね。十字架という門に体当たりする。「門を叩け」と言うから、からだで叩くんですよ、手で叩いたったダメですよ。体で叩いてぶつ倒れると、門が開ける。「いや実は開かれていた」というくらいなものです。

そうして先へ進むと、狭き門を通ると、その先は無限量に広い、詩篇23篇のごとき「緑の牧場、憩いの汀」に来る。それはもう聖霊の世界です。

本当に十字架を瞑想してその中に自分を投げ込めば、あるがままの自分を本当に投げ込んでごらん下さい。聖霊は来るから。今、あなた方はここで聞きながらも、いくらでも来ます。

私はある教会でしゃべっていたら、5、6人がしびれてしまったよ。びっくりしてしまった。どうしたんだろう、しゃべっているうちに、しびれてしまった。御霊の力がはたらいている。どうも、今のキリスト教界も、仏教の世界でも、本当の根源の現実からずれてしまっているから、これは元へ戻さなければダメです。元に帰ることが本当の前進なんです、原始に帰ることが。カトリックだの、プロテスタントだのと、どっちでもいいよ、そんなことは。使徒たちと同質の世界に帰らなくては。だから、私は「使徒的信仰」とはつきり言っているんです。これは私が主観でもつてもものを言っていたら、そんな力はありませんよ。第一、皆さんに申し訳ないですよ。偽りになるから。

パウロはダマスコ途上で引っくり返されて、自分は今まで自分を義としていたが、「口を義としていたのはとんでもない、今度はキリストの義をいただきます」

と。キリストは本当に律法以上の世界に入って——実は律法は隠れたる福音であったが、



露なる福音としてキリストが現して下さった、そのイエス・キリストに直結した、パウロは、だから、パウロは、

「私はキリストのうちに、キリストは私のうちに」

と、彼の書簡の中に164回書いてあるそうだよ。

「われ汝の中に、汝わが中に」

という、この角度

「信仰」の「仰」の字は「交」と書かなくてはダメです。信交です。これはキリストの中に信入する。信じ入る。祈り入る、祈入する。婦入、婦り入る。婦入婦依という言葉があるが、「南無阿弥陀仏」の「南無」という字はそういう意味だ。だから、私は

「南無キリスト」

とも言う。キリストの中に自分を南無する、婦入する。仏教には素晴らしい言葉があるから、私はどんどん使う。仏教であろうと、何教であろうと、およそ偽りでないものは全部、包摂してしまうですよ、福音は。

「何だ、あれは混淆宗教ではないか」

なんて。冗談言うなど。キリストは、宇宙的なキリストは、福音は、全部これを包摂していく。もの凄いです。

「父の全きが如く全かれ」

というのはそういう世界です。「無限なれ、無量なれ」と。

無即無限無量。キリストでもつて、十字架でもつて、私はもう自分なんて無くなってしまったからね、無者なんだ。キリストの無者なんだ。恩寵の無者ですよ。自分で悟って無者になんかなったのではない。相変わらず人間小池はダメだよ、しょうがない野郎だ、罪びとに過ぎませんよ。けれども、この罪びとの奥に無者という、もうひとつ奥の根源の現実をいただいている。そうしたら、その無者というところには無限無量者というものが同時に来ている。十字架と聖霊は分けるわけにいかないんです。これをはつきり言っている本がほとんどないね。

もし、できれば、キリストはいきなりペテロたちに聖霊を与えたわけですよ。ところが、

「私がこの十字架にかかって贖罪をするまでは、お前たちに聖霊をやるわけにいかないんだ」

と。だから、十字架が土台じゃないですか。本当の土台を受けとったら、聖霊は来ざるを得ないじゃないですか。祈らなければダメですよ。「祈る」というのは自分を投げ入れることです。何かお願いすることではないですよ、祈りというのは。投げ入れてから、いくらでもお願いして下さいよ。大事なのは、まずキリストの中に自分を投げ入れなければダメです。どんな苦しいことのでつくわし、生き詰まっても、その対象をいきなり祈ってはダメ。まずキリストの中に入って下さい。そうしたら、その困ったことに対するもの凄い力が逆



に出てくる。「どうにでもなれ」と。開示して下さるです。

だから、「精神状態がちょっと今日はうまくない」とか、「スランプだ」とか、「からだの具合が悪い」とか。私の集会に来なさいよ、来たら治ってしまうから。「治る」というのは、現象的に治すのではない。魂の世界から根源的に。もつたいないですよ、キリストは無条件にあなた方にももの凄いものを与えようとしているのに、「そればかりは要りません」とやっているのだからね。そして、いわゆる文化文明でもってやっているのだから。しまいにほくたびれてしまつて、何かにぶつかるといふと、やけくそになったり。決まっていゝるんだよな。どんな偉そうな人でも、おしまいはダメですよ、それは本当に。……（異言）……。困るです、私は異言が出て。

「いや、その頃は異言もあつたでしょう。その頃はそういう使徒行伝みたいなことがあつたでしょうが、今はそうではない」

なんて、何を言っているかと、今の牧師さんたちは。今も使徒の頃も、キリストはどこが違うんですか。

もう世界は、こんなことをしていたら本当に、神に背いていたら、それはいつか「羔の怒り」が来るですよ、黙示録に書いてあるとおり。恐ろしいよ、この黙示録のお終いの方は。今は一番本当は読まなくていかんのは黙示録なんです、この20世紀は。大政治家ならば、本当の大宗教家が、この大信仰をその政治家が持ったならば、そうしたらば、——カーターはちょっと神経質だね、キリスト教ならもつと凄いな、そして、ブレジネフと握手したらいいですよ。「もうよそうじゃないか、本当に」と。我々は同じ人間で、お互いに有無相通じて、それぞれのイデオロギーも尊重しながら、「ああ、結構です」と。

イデオロギーであろうと、学問であろうと、何でも本当にそれを行使することのできるのは、この御霊の現実に入つて、神の智慧の中に入った人です。これはパウロが本当にした。まあパウロなんてのは本当に凄いやつです。だから、キリストはパウロを引っくり返したんです。劇的な大転回をさせた。キリストを除いては、パウロだけの人は本当に世界中になかったですよ。大変なやつです、このパウロというのは、この手紙は。彼はもう手紙の中で叫んでいる。叫び呻いている。

とにかく、ソ連が恐いのも何でもない。原子爆弾が恐いのも何でもない。人間の心なんです。サタンに囚われているところの人間の心が悪魔の手下になっている。

「剣を執れば 剣に亡ぶる」

と。これも私の讚美歌にある「神を無みして」（1979/12/16作）。

「時は来れり 大和島根の

民の在り方 神に問われん。

心おこれる 昭和元祿

混濁の世は いずこへゆくや。」（時は来れり」1979/12/7作）



これは讚美歌だよ、「きけよやひびく」の歌調で。

●即如一如の世界に入る

皆さん、本当にね、即の、即如の世界に入らなかつたら、もう信仰はやめた方がいいくらいですよ。即如、一如、これはみんな仏教の言葉です。いい言葉だね。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

というこの世界は、御霊において初めて本ものになる。何でもありませんよ、本当に十字架に平伏しなさいよ。そうして、自分がすつ飛ばされることを本当に受けとってごらんないよ、「もう、自分なんか問題ではない」と。ウワーツと来るですから、聖霊が。そうしたら、

「何かしらんが、これは変わった、ちがう。相対的人間小池は相変わらずダメな野

郎だけれども、絶対的なものが上から来ている」

と。これはルッターが、

「義人にして罪びとである」

という、二律背反のことを言った。矛盾構造。そのとおり。けれども、その義人がこの罪びとをどこまでも引つ張り回しながら進んでいく。これはキリストの力、聖霊の力だから、しようがないです、誰が何と言おうと。

絶対矛盾の自己同一。さっきの否定道であり、また矛盾道である。キリストは「道」と言うけれども、その道の内容は凄いんだから。道という。もうひとつ、逆理道ということと言える。何ですか、その逆理道とは。

「右の手のすることを左の手に知らすな」

という。どういうことですか。右、左という相対的なものがあるが、ありながら、「右だけ」という。これを逆理という。左はもう意識の中にある。白隠の「隻手の音」という。両手を打てば音が出る。片一方の手だけで、この隻手の音が聞こえるかと。

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声きけば生まれぬさきの父をしぞ思う」

という。闇の夜に鳴かぬ鳥の声が聞こえるかと。それを聞けば。

「語らず言わずその声聞こえざるにその響きは全地にあまねし」

という詩篇19篇にあるではないですか。霊の耳をもって聞き、霊の目をもって見る。ありがたいですよ、聖霊の智慧は。

さきほど読んでくださったあのコリント前書のあるところ、素晴らしいところだ。さすがにパウロです。

「無き者を」

とあそこにある。「タメオンタ」という字。「無き者」にこそ働くんです、キリストは。その無き者は、「なかなか成れません」ではないですよ。十字架が私たちを無き者にして下さったんだから。私の無い者にして下さったんだから、十字架というこの恩寵が。



しかし、天界にはどういう人が行くか知りませんよ。キリストの「キ」の字も知らない人も、神さまから見ると、行ける。私なんかキリストに、

「ちよつとお前はさきに地獄へ行つてから来い」

と言われるかもしれない(笑)。そういう、誰も人のことはわからん。自分自身のこともわからん。とにかく、救われていることの確かさは、十字架と聖霊を受けたことにおいて。しかし、私の相対的人間小池の実存を問われたら、キリストは、神さまはもうちよつと、

「後煉獄に入ってから、入れてやるから」

と、そんなことかもしれない。「前煉獄」というのは、キリスト以前を前煉獄という——私が勝手にこんな言葉を作った——キリストが出てからののが後煉獄という。どっちにしろ、この門を通つて行かなければ行けないです、こっちには。これは「仮天国」です、パラダイスは。最後の審判がきてから、これが神の幕屋の、黙示録21章以後の新天新地、永遠の神の国へ。これは凶表ですから。凶表でこう表したわけです。その時に、下の方で「第二の死」がくる。これは本地獄だから。ここに入れられたお終いだ。こっちは仮地獄だ。

いいですか。次の世界に行った人がこっちだか、あっちだか知らないけれども、祈つてやるのが大事なんです。特に命日には。自殺なんかした人はやっぱりその時刻に出てくるだろ。あの霊の世界は妙なものだね。丑三つ時に幽霊が現れたりする。幽霊が現れたら、恐がつてはいかんですよ、「どうなさいましたか?」と(笑)。そして祈つてやる。そうすると消えていくから。私は本当にそれを一遍やりたいんだけど(笑)。本当ですよ。そういうわけで、もう恐いものはないんです、本当に。……天界と地界は続いていますから、いつもキリストにある祈りでもって、向こう側に行った人のために祈る。心配ではないですよ。祈つてあげる。そうすると、こちら(天界)でだんだん上へ上がっていく。それから成長していくんです、霊体を着せられて。もう私はそのことをある事実でもってちゃんと知っている。だから、決して悲しんではいかんですよ。その次のことをここで祈る。だから、祈りというのは大変な世界です。電波よりもつと霊波の世界だから。

それで、いろんな教会がたくさんありますが、それが「聖霊の幕屋」という本質を持てば、これが本当の全体としてキリストのからだとしての「キリストの幕屋」です。それがやがて「神の幕屋」でもって最後にできる。聖霊の幕屋、キリストの幕屋、神の幕屋という、こういう歴史的な展開をしています。

預言者はそれぞれ音信をいただいて、彼らは本当に実存そのものをもつて預言していった。その預言が全部、キリストに集中します。ガラヤ湖のようなキリストに全部、この預言は。彼らの言葉は期せずしてキリストに集中しています。それからキリストから今度は使徒たちを通つて流れる。キリストは大変な湖です、キリストというガラヤ湖は大変な湖です。それで、私たちから生命の泉が湧き出でていく。

こういう話がある。エジプトのザイスという所にある日、お師匠さんと弟子が行った。



そこに白沙に覆われた大きな象があった。「一体この象は何だ？」と弟子が聞いたら、そのお師匠さんが「それは真理だ」と言う。「そうか、その真理を私は見たいな」と。真理という象を。けれども、そのお師匠さんは言った、「神自らがこのベールを脱がせて人に示すまでは、これを取ってははいかん。もし自分でそれを取ったら、どういうことになるか知らんよ」と。ところが、その夜になって、この青年は象を見たくてしようがないものだから、そつと取って覗いた。そしたら、翌朝、その青年はそこに倒れて死んでいた。そういう話がある。ということとは、何を表しているかというところ、「本当の真理は啓示による」ということです。上からの示し、上からの掴みかかり。聖書の世界はそういう啓示の世界なんです。啓示の宗教である。だから、その啓示の一番の中心はイエス・キリストが神の啓示の一番の中心。その啓示が歴史的にきているのがこの預言者たち。それからキリストのあとの使徒たち。それから歴代の今日に至るまでの本当のクリスチャン。だから、

「我は真理なり」

とキリストが言われたのは、正に啓示の真理なんです。神の露なる真理。だから、福音書に来て本当に——「こんなことがありますか？」ではないですよ——降参して下さいよ。そうしたら、キリストにつかまれるから。もうたまらんですよ、ええ。「わかるのわからないの」なんていう世界ではないということに早く気がついて下さい。おしまい。

● 祈り

では祈ります。聖書という驚くべき生ける文字、このドラマを通して、私たちにじかじかに今迫って下さった主さま、感謝いたします。私たちは何でも全身をもってぶつかっていかなければ、本ものにならないことを知ります。どうぞ、頭でも手足でもなければ、全身をもってあなたにぶつかって、イエス・キリストの特に中心であるところのマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書に本当に読み入ります。また、祈り入ります。自分を投げ入れます。そして、あなたにぶつ倒されることによって本当に立たされることを信じます。

あなたは本当にどうにもならない私たちのために十字架にかかって下さいました。「もう何も心配要らん」と。ありがとうございます。そして、本当にパウロと共に私はあなたの十字架に十字架せられて、もはや生きておりません。しかしながら、あなたが泥だらけの私たちの中に入って、そしてこれを活かし光を与え、内側から本当に生命を与え、愛を与え、一切に対して驚くべき力を与えて下さることを感謝いたします。

「敵を愛せよ」と。愛せます。何となれば、あなたの力が、あなたの愛がそれをするからです。私たちの祈りは決して空しくないことを知ります。本当に生き甲斐があるということとは、あなたをいただいて生きることであることをいよいよ身をもって一日一日と体験していくことができますように願ひ奉ります。

かくして、どんな運命環境にあつても、いやいろんなことが遭えばあうほど、逆に力が入っ



ていき、本当にこれが驚くべきあなたの道であることを知ります。もはや相対的な判断は乗り越えて、なんと素晴らしい根源の現実か。あなたを讃え奉ります。「御国を来らせ給え」とは既に御国は来ているからです。

「幸いなるかな、汝、わが十字架によって霊が本当に貧しくされた者よ、天国即ち

聖霊の我、なんじのうちにあり」

と、あなたは言つて下さるから感謝であります。

かくして、すべてあなたの御言は驚くべき恩恵の言葉として私たちはこれを受けとつてその現実に入つて参ります。かくして、もはや死んでも死なないような生命が私たちの中に來て、どうか、これを人に与え、苦しめる者、悲しめる者、求める者、悩める者に、これを分かち与えて行かざるを得ません。一人びとりが本当の伝道者です。どうぞ、かくして、この道を伝えるところにあなたの生命が限りなくまた流れてくることをいよいよ体験していくことができますように願ひ奉ります。

今日來られたこの兄弟姉妹たちはみなそれぞれいろんな課題を持ち、またいろんな人によって、ああ驚くべきことがそこに展開することができますように、願ひ奉ります。

かくして、この日本の国のいろいろな問題も実は、問題の問題は、「あなたを本当に受けとらない」ということにありました。教育の根底は宗教にあることに気がつかなければなりませんでした。どうぞ、それらのことに對する、まことの「生命より生命へ、力より力へ、讚美より讚美へ、栄光より栄光へ」と、あなたを証していくことができますように切に願ひ奉ります。

今、尽くしませんが、心からの感謝と讚美と祈りと、ここに集まれる兄弟姉妹たちの一人びとりのそれと共に、イエス・キリストの御名により捧げ奉る。アーメン。

